

晴れた日には出かけよう！
～まちのミリョクを再発見!!～

7

おおぐの
「大久野ふじ」美しくも力強い

孤高の巨樹



大久野の坊平に「大久野ふじ」と呼ばれ親しまれている大きな藤の古木があります。

大久野ふじは、昭和31年（1956）に『大久野のフジ』として東京都の天然記念物に指定されました。根元の周囲はおよそ3m、高さ27mにも及ぶ大樹です。アラカシとスギにからみついたその容姿は、大蛇がトグロを巻いたようにも見えます。また周囲にも多数の蔓(つる)を伸ばし、野生のフジとしては都内でも有数のものです。



大蛇の様に巻きつく太い幹

フジは、本州・四国・九州の低山地や平地に自生するマメ科の落葉植物です。花の見頃は例年4月下旬～5月中旬になります。成長に従いほかの樹木に蔓が巻きつくことから、杉などの造林では邪魔物扱いされ、大きく育つ前に伐採されてしまうことが多いそうです。ところが大久野ふじの育った山は、西福寺が所有しているため伐採を免れ、すくすくと大樹に育ったようです。

さて、フジは古くから日本人の生活に密着し、様々な形で愛され親しまれてきました。日本最古の和歌集である万葉集には、26首のフジを詠む歌があります。サクラが46首である事からも、サクラと並ぶ「春の花」として古くから親しまれていた事がわかります。

また、フジのしなやかな蔓は繊維としても利用され、古事記にもその記述が見られます。樹皮を剥いて、灰汁で焚き、細く裂いたものを糸として使っていたとあります。平安貴族はフジの繊維で織った藤衣を喪服として用いていたそうです。また、フジの繊維で織った衣はとても丈夫で水にも強く、江戸の時代まで作業着として使われていました。藤衣は、衣類としては粗雑なもの、忌むべきもの扱われていたのです。

その一方で、フジは二面的な意味を持つ植物で、神聖な花としての一面も持っています。美しく垂れ下がる花は、稲穂がたわわに実る豊穰を連想させることから、とても神聖な樹であると考えられていました。神職にあった中臣鎌足が645年の大化の改新の後に藤原氏を名乗ったのは、神聖な藤に由来するといわれています。



園内の見晴台から見る大久野ふじ

「大久野ふじ」周辺は、森の公園として整備されていてフジの時期以外でものんびり楽しめます。公園の前を通る道は蛇野峠と云い、峠を超えて玉の内からふれあい農産物直売所への散策もお勧めです。大久野ふじの花をご覧になるなら公園の見晴台からの眺めが最高です。眼下には山肌を薄紫に染める藤の花が、遠方には高尾山や神奈川県方面の山並みが見渡せます。また、山肌を染めるフジの花は、秋川街道からも観ることができます。



山肌を薄紫色に染めるフジの花

アクセス

大久野ふじへは「萱窪」バス停下車、徒歩18分です。秋川街道を青梅方面に向かい、多摩聖地霊園の前の信号を右折、100m程行った十字路を左折です。



日の出WALK (観光マップ)【J-6】

